



写真-1 揖保川に架かる名畑の流れ橋（平成25年7月撮影）

■ 洪水にしなやかな流れ橋・・・でも維持管理が大変

中国自動車道の山崎 IC で降りて国道 29 号を北へ 15 分ほど走ると、道の駅「播磨いちのみや」に着きます。ここは、宍粟（しろう）市一宮町須行名（すぎょうめ）。車を停めて、すぐ西にある伊和神社の境内を通り、名畑（なばたけ）集落を抜けると揖保川の堤防に出ます。その堤防を 200m ほど下流に行った所に「名畑の流れ橋」が架かっています。

玉石張りのコンクリート製橋脚の上に桁を渡した 6 径間の木橋で、橋長は約 70m、幅員は約 80cm です。桁は、2 本の丸太（杉または桧、 $\phi \approx 15 \sim 20\text{cm}$ ）の間に杉板（ $w \approx 35 \sim 45\text{cm}$, $t \approx 15 \sim 20\text{cm}$ ）を挟み、それを番線で結束したもので、それらの桁はワイヤーで玉石張護岸天端のアンカーにしっかり繋がれています。洪水で桁が流されても、洪水後にワイヤーを手繰って桁を元の位置に戻せるようになっています。

そうはとっても、長いもので 10m もある丸太や板を架けるわけですから、集落総出でなければ架け直しはできません。加えて、洪水の多い年であれば、何度も架け直しをしなければならないこともあります。

維持管理に手間のかかる流れ橋が、管理する人たちの高齢化などによって各地で消えていく中、「名畑の流れ橋」は 40 戸あまりの名畑集落によって守られている貴重な橋です。

超高齢化社会の中で、洪水の度毎に落ちるこの流れ橋をその都度架け直し、維持していくのは大変なことです。そのあたりも含め、この橋の歴史や架け直しの方法等について、「名畑橋管理組合」組合長の八木 智さんと近隣にお住まいの八木良介さん（兵庫県農林水産部 OB）にお聴きました。



写真-2 名畑の流れ橋

■ そもそも、いつ頃何のために架けられたのか？

かつて対岸（揖保川右岸）では、畑が開墾され、養蚕のための桑が植えられていました。また、各家には農耕用の牛がいて、その飼料にする草を刈るため、あるいは、植林された杉の手入れや薪を採りに行くために川を渡る必要があって橋が架けられたとされています。



写真-3 三山宮山遷座祭・流れ橋を渡る



写真-4 三山宮山遷座祭・新調した祠を担いで…



写真-5 三山宮山遷座祭・新調した祠を安置

※ 写真-3～5『流れ橋の土木民俗学的研究』から引用

一方、伊和神社を守る三山の一つである高畑山が揖保川右岸にあり、「三つ山祭※¹」の時には、新調した祠を担いでこの橋を渡り、山道を登っていきます。

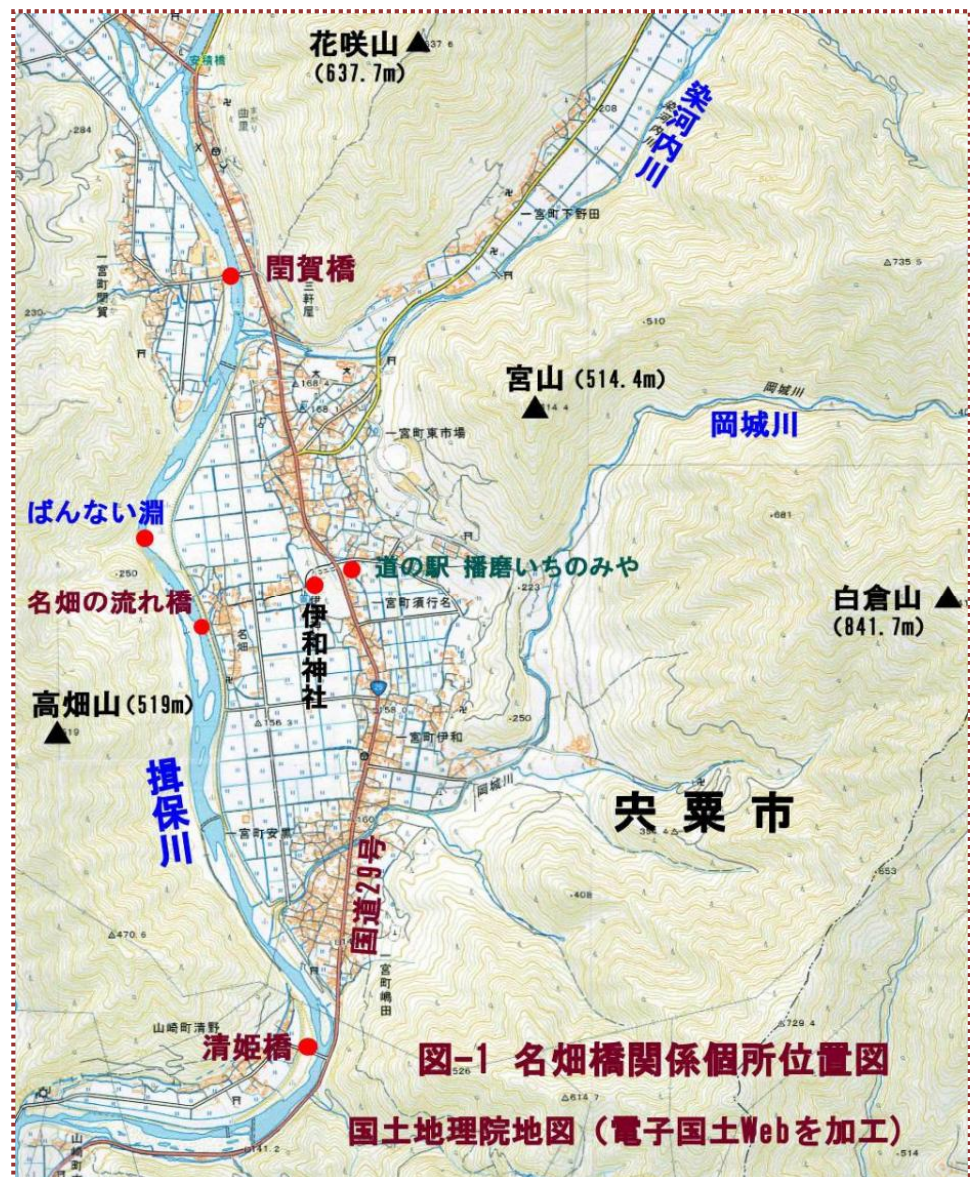
ただ、この祭りは 60 年に 1 回行われるものなので、そのために架けたというものではないでしょう。

架橋の時期は、「明治 44 年生まれの親父が物心ついた時には、橋はすでにあった」ということなので、大正初期にはすでに架かっていたと思われます。

また、須行名村に『明治 39 年度人足日誌』が残されていて、そこに労役提供として「大井ハシ板捨ひ」（捨いの誤りか）、「大井ハシ板上げ」といった記載があります。

流された橋桁を回収に行ったり、洪水で落ちた橋桁をワイヤーを手繰って元に戻していたと解釈

でき、これが流れ橋のことを指しているのであれば、明治時代末期にはすでに流れ橋があったと考えられます。



※¹ 三つ山祭：三つ山祭は 60 年に一度、一つ山祭は 20 年に一度催行される。三つ山とは、伊和神社の東にある白倉山（841.7m）、西にある高畑山（519.0m）、北にある花咲山（637.7m）を指し、一つ山とは北東にある宮山（514.4m）のことで、これら四つの山は伊和神社を囲む位置にある。それぞれに磐座（いわくら）と祠があり、祭礼では祠を整備して山々を遥拝する。三つ山祭では、通常のお旅所である神社西方の揖保川の「ばんない淵の河原」で伊和三山の磐座を祀る神事を執り行う。

■ ししば流された“じゃご”と呼ばれる橋脚

明治期かそれ以前に架けられた橋と考えられますが、地域には高度な技術力も豊かな財力もないため、機械力には頼れず、地元で調達できる資材を用いて、もっぱら人力による施工となることから、かなり脆弱なものだったと考えられます。

八木さんの話によると、橋脚は図-2のようなものだったそうです。施工方法は、まず基礎とする箇所を「水替え」なしで床均し(とこならし)を行い、そこに「はで足」と呼ばれる稲架けの足に使われる丸太(L≒1.5m)を持ち寄って、直径約2mの円筒形に立て掛け、割り竹を縄(な)って4本の輪をつくり、樽の周囲に留めるタガのようにして、丸太と竹を稲わらで結び付け固定します。その中に、バケツリレー式に運んだ河原の石を詰め込み、これを橋脚とします。この上に2本の丸太と橋板を渡して橋が完成。

地元では、この橋脚をじゃご(蛇籠のこと)と呼んでいます。しかし、円筒形の器をつくり、その中に玉石を詰め込むという点では蛇籠と似ていますが、竹やツル(今の時代であれば鉄線)で編まれた可撓性を有する蛇籠に対し、丸太で造られた可撓性を有しない器は、江戸時代、井堰の構築等に用いられた沈柁(しずめわく：図-3)の変形と考えたほうがしっくりきます。(「ひょうご水百景」No.42 加古川・五ヶ井、No.61 竹田川参照)

このように、橋脚の根入れがほとんどなく、丸太でつくった円筒形の柁を固定しているのが竹と稲わらなので、洪水が起きると橋脚そのものが流されてしまうことが多く、柁は回収できても、架け直しは橋脚づくりから始めなければならず、ほとんど1日がかかりだったそうです。

現在のような玉石張りのコンクリート製橋脚になって以降は、根入れが1.5m程度確保されたこともあって、橋脚が流されたことは今のところないそうです。

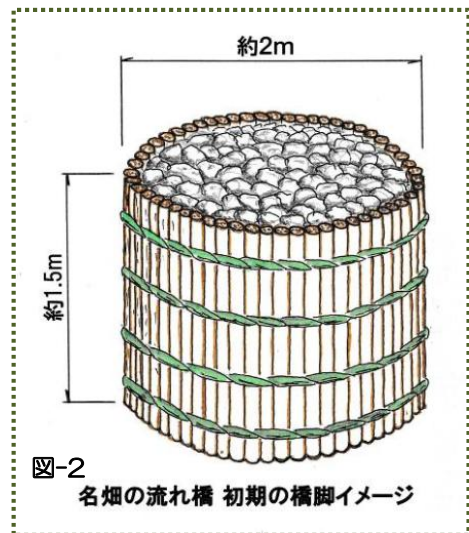


図-2 名畑の流れ橋 初期の橋脚イメージ

なお、現在のコンクリート橋脚天端は、堤防天端より4.3m～4.6m低い位置にあり、平常時の水面より約2m高い位置にあります。



写真-6 現在のコンクリート製の橋脚

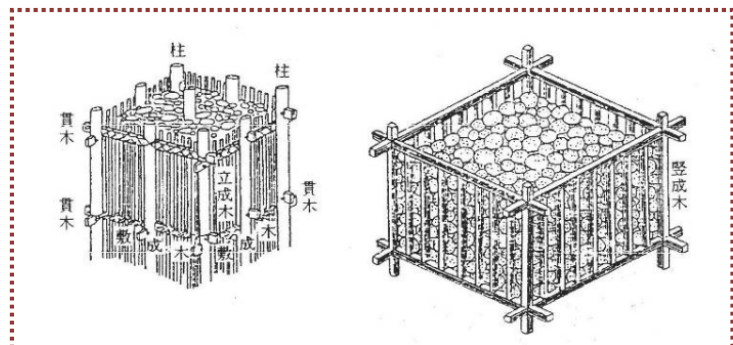


図-3 沈柁工(『日本の水制』から引用)

■ 流れた橋柁の回収や腐食に伴う更新

流れ橋の柁は、2本の丸太と1枚の厚い板材(橋板)で構成されていますが、橋板はかなり高額だそうです。なので、少々の洪水では流失しないように、これらの柁は堤防に打ち込まれたアンカーにワイヤーでしっかりと繋がれています。しかし、時にワイヤーが切れるなどして橋柁が流失することがあるそうで、そうした場合でも、橋板が見つかりやすくするために、各橋板に「シソウイチノミヤナバタケハシ」と刻んでいます(写真-7)。

その効果もあって、洪水後に下流の人から橋板が流れ着いた旨の連絡が来ることもあり、その時は大八車を引いて(今は軽トラ)回収に行ったそうです。大抵は、河東村(現・宍粟市山崎町)の野々上にある河東統合頭首工(写真-8)に引っかかっていることが多かったのですが、揖保川河口に近い網干まで引き取りに行ったこともあるとか。



写真-7 番線で結束された桁

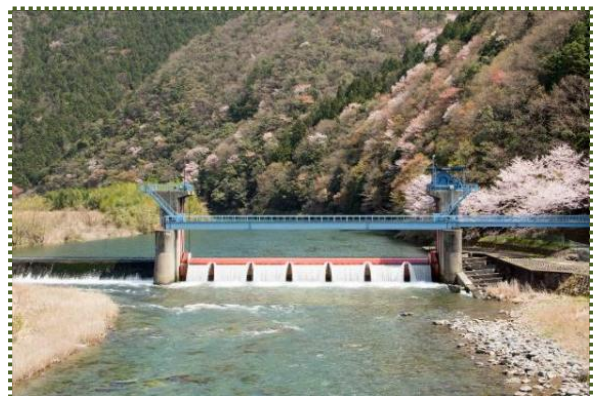


写真-8 河東統合頭首工（地元では湯堰と呼んでいる）

回収に行くときは、行く人に「橋探し賃」が支払われるそうです。橋脚が現在のような玉石張りのコンクリートになってからは橋板が流される頻度は格段に低くなりましたが、それでもワイヤーが切れて流されることが時々あるそうです。もし、見つからなかった場合は、赤西渓谷の伐採木を購入しているとか。

また、木材なので時間の経過とともに腐食することから、毎年「防腐剤」を塗っているそうですが、それでも 20～30 年で更新しなければなりません。その場合、6 径間を一挙に更新するのではなく、毎年 1 径間ずつ更新して管理費の平準化を図っているそうです。

■ 河状の変化に伴い橋も変化

現在、流れ橋には6基の橋脚がありますが、右岸寄りの2基は他の 4 基とは形状が少し異なっています。

平成 21 (2009) 年 8 月の台風第 9 号による兵庫県西・北部豪雨に伴う出水の影響で河状が変化し水面幅が広がったため、橋脚を増設しています。

一方、流れ橋を渡り、中洲を横断すると浅瀬があり、そこに飛び石が置かれています（写真-13）。

八木さんの話によると、かつての瀬はもう少し水量も多かったことから、しょぼい 2 径間の流れ橋があったそうです。ただ、左岸寄りの瀬に比べると流量も少なく、水面幅も短かったことから、左岸寄りの流れ橋で「お役御免」になった桁材を右岸寄りの橋桁に転用していたそうです。

その後、河状の変化に伴い瀬が浅くなり、わざわざ橋を架けるまでもなくなったことから、代わりに飛び石が設置されて今に至っています（写真-13）。



写真-9 流れ橋の橋脚

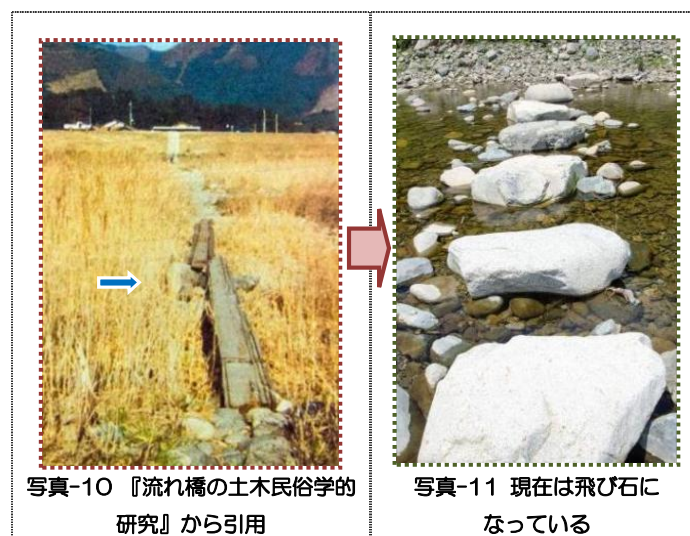


写真-10 『流れ橋の土木民俗学的研究』から引用

写真-11 現在は飛び石になっている

■ モノローグ

かつて名畑集落の生産活動を支えていくために必要に迫られて、集落が自力で架けた流れ橋。洪水に流されないようにするためには、高い橋脚を設置しなければなりません。当時、名畑集落にそれを可能にする高度な技術力も豊かな財力もありませんでした。

名畑に暮らす人たちが知恵を絞り、地元で容易に確保できる資材を用い、集落全員で汗をかいて架けた橋。“洪水にしなやか”というのは、聞こえはいいかもしれませんが、洪水の度に流され、その都度集落総出で架け直しをしなけ

ればならず、時に“名畑の貧乏橋”と揶揄されることもあったそうです。地元にしてみれば、おそらく苦渋の選択としてこのような形式を採ったものと思われます。

地元の方は、この流れ橋を「なばたけばし」と呼んでいます。「連濁」という音韻現象から「はし」ではなく、「ばし」と呼ぶのが一般的ではありますが、橋板には「ナバタケバシ」ではなく、「ナバタケハシ」と刻まれています。これは、『ひょうご水百景』No.46にも書いたように、「橋の下の川が増水し濁ると橋が流されるので、そうならないように」との思いを込めて濁点を取ったものと思われます。この続きは次号で。

ノアザミ(野薊)

キク科の多年草。揖保川堤防法面に咲いていた。花期は5～8月で、アザミ属の中では春咲きの特徴をもつが、まれに10月まで咲いているものも見られる。分布域は広く、本州、四国、九州の草原や河川敷に見られる。アザミ(薊)の由来は、花に引かれて近づくと葉の棘にさされる、つまり「あざむく」から来た説と、アザは昔は棘の意で、棘のある実から転訛したと言う説、また、「アザム」(驚きあきれる、興ざめるの意)という言葉に由来するという説もある。ノアザミ(野薊)の名前は、野に咲くアザミ(薊)という意味。



写真-12 揖保川堤防法面に咲いていたノアザミと吸蜜中のベニシジミ

【参考資料】

- 1 『流れ橋の土木民俗学的研究』(修士論文) 東京大学大学院工学系研究科・安藤達也 平成23年3月
- 2 『宍粟市再発見! 夢しそう2012 冬号 Vol.9』 宍粟市 平成24年12月
- 3 『日本の水制』 山本晃一 平成8年1月
- 4 『ノアザミ』 花々のよもやま話 HP 平成25年7月
<https://plumkiw948.at.webry.info/>
- 5 『伊和神社』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：平成29(2017)年6月 『ひょうご水百景』No.73

改訂：令和8(2026)年6月 『ひょうご水百景』No.73